

リー・クアンユーの遺産とポスト・リー時代を 迎えたシンガポールのゆくえ

奥村みさ

日時：2015年7月10日（金）15：00～17：00

会場：名古屋キャンパス 16号館アネックスホール

基調講演

「ポスト・リー時代のシンガポールの政治と社会」

北九州市立大学教授 田村 慶子 氏

報告 1

「ポスト・リー・クアンユーの経済と文化制度」

駒澤大学教授 川崎 賢一 氏

報告 2

「人材育成の視点から見るシンガポールの教育の現状と未来」

昭和女子大学准教授 SIM Choon Kiat 氏

7月10日（金）午後3時より、名古屋キャンパス 16号館アネックスホールにて、国際英語学研究所国際英語学専攻学術シンポジウムが開催された。

本年2015年はシンガポール独立50周年にあたり、かつ奇しくもポスト・リー時代の幕開けの年となった。この機会にシンガポールの発展を振り返るとともに、「国父」リー・クアンユー亡き後のシンガポールのゆくえについて、上記3つの視点から基調講演と2つの報告がなされ、その後、質疑応答を交えながらパネルディスカッションを行った。

当日は日本貿易機構（JTERO）名古屋情報センターの後援、シンガポール研究会の協力をいただき、本学教職員、学生、学外からの参加者など60名以上が参加し、熱心に耳を傾けた。シンポジウム後にはイタリアン・トマトに会場を移し、懇親会にて更に議論を深め、盛況のうちに幕を閉じた。

以下に基調講演と二つの報告の要旨をまとめた。

【基調講演】

「ポスト・リー時代のシンガポールの政治と社会」

シンガポールの大きな特徴として、都市国家であること、そして天然資源はほとんどないことが挙げられる。

面積は 112km² (東京都 23 区よりも少し大きい)

人口：531 万人

シンガポール人 382 万人

市民 329 万人、永住者取得者 53 万人

華人 75%、マレー系 14%、インド系 9%、その他

長期滞在外国人 149 万人

1 人当所得：US\$ 56,300 (2014 年、世界第 9 位)

* 日本 US\$ 36,331 (世界第 21 位)

1965 年にマレーシア連邦から分離・独立した小さな都市国家は、当時、土地も人口も、天然資源もなく、どのように生存・発展していくかが、至上命題となった。その後、この都市国家の発展を 50 年間牽引してきたのが、リー・クアンユー初代首相 (Lee Kuan Yew 1923 年 9 月～2015 年 3 月) であった。リーは「国父」と呼ばれるほどの絶大な影響力を行使して発展に臨んできた。

「求められているものは、頑健で、強固で、訓練と鍛錬の行き届いた社会を創ること。そのような社会を創ることができれば、我々はここで 1000 年以上にわたって生き残ることが出来る」(リー・クアンユー)

リーの発展戦略をまとめると次の 7 点が挙げられる。

次々と成長産業を転換、政治の安定、国有地の確保、二言語政策、エリート主義的選抜、国民にマイホームを、外国人の受け入れ。

ところが、50 年間の急速な中央集権的発展は同時に国民の不満も育んだ。その背景には経済格差の拡大がある。ここにきて、既存の発展モデルへの異議申し立ても顕在化しつつある。それはひとつには最近の選挙結果、野党の躍進、またブキット・ブラウン墓地撤廃反対運動などの市民運動にも見ることができる。1950 年代に国家治安維持法で逮捕された人々の反体制運動についても見直しが試みられている。

リー初代首相の死去が意味するものはなにか。

それは、「発展がすべて」の時代の終わり、を意味する。政府与党 (人民行動党) の長期独裁政権はまだ揺るがないであろう。確かに、社会福祉政策の見直し (国民皆保険制度など) といった社会の高齢化への対策なども見られる。しかし、メディアへの規制はまだ続行され、土地収用法、治安維持法も存続していくであろう。

そのような世論の流れの中、発展戦略に異議を唱える人々が増加している。果たして

与党は「上からの改革」が出来るか、労働者党（最大野党）は「受け皿」になることができるか、といった問題が議論されるようになってきた。

経済においては、外資が主導する経済政策は当面変わらないであろう。しかし、シンガポールの国際的地位は相対的に低下するであろう。リーという強力なリーダーかつ、世界の指導者との太いパイプがなくなること、シンガポールが受ける外交的ダメージは大きい。

最後に、日本との関係だが、建国 50 周年という機会に歴史の見直し傾向が強まり、ナショナリズムが高揚するシンガポールでは相対的に日本のプレゼンスが弱体化している。また、逆に日本の若者層の歴史への関心の薄さも加わり、日星関係はかつてほど強いものではなくなっている。

【報告 1】

「ポスト・リー・クアンユーの経済と文化制度」

リー・クアンユーはシンガポールにとってその発展を支えてきた「国父」ともいえるべき存在だが、こと、文化芸術に関しては関心が低く、リーにとっては、文化制度は常に経済政策の一環として捉えられてきた。

1965 年の独立以来、経済発展政策が最優先され、国家形成においては、経済的発展、政治的安定、そして社会的平等が基本原則とされた。多民族社会であることを鑑み Racial Harmony への持続的配慮、植民地支配からの脱却を内外に示すべくアジア的価値観の強調が唱えられ、実力主義による最小限の福祉を標榜してきた。

そのような歴史において、1989 年以前は「文化の砂漠」期と呼ばれている。ひたすら、国の生き残り（サバイバル）をかけ、経済成長優先で近代化・工業化に邁進した時期であった。それが 1989 年頃から、シンガポールは「ポスト・サバイバル」時代に入ってくる。すなわち、シンガポール社会は経済的な豊かさを享受する段階に入り、次に目標としたのが、「第 1 級のグローバル都市」としての文化的・芸術的豊かさを目指すことであった。1989 年以降、文化政策は 4 段階の歴史的展開を辿ってきた。

1989 年～1994 年：文化芸術評議会（ACCA）レポートに基づく長期計画の策定、芸術評議会（NAC）、国家遺産局（NHB）等の創設、インフラ整備開始

1995 年～1999 年：中期目標の確定 Toward "A Global City for the Arts (1995)"

2000 年～2011 年：ルネッサンスシティレポートに基づく 3 期にわたる計画の実施

2012 年～：芸術文化レビュー（ACSR）に基づく長期計画の策定、NAC 等の所属省の変更

このような文化政策の段階を経て目指す「第 1 級のグローバル都市」とはいかなるものか。リーによれば「現代版ベネチアとしてのシンガポール」であり、経済的発展と政治的安定を保ち、成熟した、リッチなグローバル都市を維持することが目標となった。

だが、現代のシンガポールは急速な経済発展を遂げたがゆえに、社会的不平等も広が

り、格差社会としての側面も見られ、生活費も高騰してきている。

そのような中で、ポスト・リー時代の文化制度はどのような方向に向かうのか。

第一に、ポスト・サバイバル期に入って、洗練された文化レベルへの達成・維持の道筋をつけることが重要になってきた。第二に、経済的格差による国民の不満と新しい生活スタイルの模索である。特に若い世代における「自由への要求」また「報道の自由」への対応が求められている。第三に、文化的アイデンティティ確保の問題である。エスニック・アイデンティティとコスモポリタン・アイデンティティのはざままで、どのようにしてシンガポール人としてのアイデンティティを形成していくのか。

最後に、独立 50 年という転換点すなわち Singapore 50 の意義を考える必要がある。国父リー・クアンユーが独立 50 年の年に亡くなり、シンガポールは新たな時代に入った。今後は、経済のための文化政策ではなく、シンガポールの文化的アイデンティティ形成のための文化政策の展開に注目していきたい。

【報告 2】

「人材育成の視点から見るシンガポールの教育の現状と未来」

シンガポールは天然資源の乏しい都市国家であることから、人材育成には独立当初から力を入れてきた。受験戦争も厳しく超エリート教育で知られている。日本の大学進学率が 51% であるのに対して、シンガポールは僅か 5% しか、国内の大学に進学できない。それは大学の数が少ないこともあるが、10 歳からすでにストリーミングが始まるからである。

同学年で Top 1% は小 4 から Gifted Children Programme へ配される。

Express コースの中には、Intergrated Programme を実施する中高一貫校も含む (2014 年末現在、全体の中学校数の約 12% に当たる 18 校)。

Normal コースの生徒の約 3 割を占める Normal (Tech) の生徒 (その他は Normal (Academic) の生徒) や、シンガポール全国統一中学入試 (PSLE) に 2 回挑戦してもクリアできない児童と中学校中退者を入学させる学校もある。

最近では受験戦争の激化を憂えて、全人格的教育も強調される傾向も出てきた。

Sports School、School of the Arts や School of Science & Technology、NUS High School など特殊分野に特化し、「学力」だけを求めないような新しいタイプの中学校・高校や 21 世紀型学力を育む “Future Schools” も増加中である。

シンガポールの教育の将来としては、生徒中心・価値志向が挙げられる。特に、“4 'Every's” といわれる目標が掲げられた。それは、

Every School a Good School

Every Student an Engaged Learner

Every Teacher a Caring Educator

Every Parent a Support Parent

今後の教育の課題としては、教育の内容や全体のレベルは常に周りの国々より一歩も二歩もリードしていなければならない、という使命感がシンガポールの教育界にはある。

- ・ 学力下位層のレベルをどう引き上げるか
- ・ 子どもたちへのストレスをどう減らすか
- ・ 階層間、民族間の格差をどう縮めるか
- ・ 新移民、外国人労働者の子どもの教育をどう考えるか

などが今後の問題点としてあげられる。

以上の3つの側面からシンガポール社会の50年を回顧した後、パネルディスカッションでは、上記の講演、報告を向けて、さらに未来に向けた都市国家の課題について、フロアも巻き込み、熱心な議論がなされた。

**リー・クアンユーの遺産と
ポスト・リー時代を迎えたシンガポールのゆくえ**

中京大学国際英語学研究科国際英語学専攻2015年度シンポジウム

開催理由：今年2015年はシンガポール独立50周年にあたり、かつ新しくもポスト・リー時代の幕開けの年となりました。この機会にシンガポールの発展を振り返るとともに、「原文」リー・クアンユー亡き後のシンガポールのゆくえについて、シンガポール研究の第一人者を迎え、シンポジウムを開催します。

スケジュール

基調講演「ポスト・リー時代のシンガポールの政治と社会」
田村慶子(北九州市立大学教授)

報告①「ポスト・リー・クアンユーの経済と文化制度」
川崎賢一(駒澤大学教授)

報告②「人材育成の視点から見るシンガポールの教育の現状と未来」
SIM Choon Kiat(昭和女子大学准教授)

パネル・ディスカッション

日時：2015年7月10日(金)
15:00~17:00

会場：中京大学名古屋キャンパス
アネックス・ホール
16号館(アネックス)6階 入場無料

(地下鉄名城線「八事駅」5番出口方面にあるエスカレーター手前の「アネックス出口」の16号館連絡エレベーターで6階へ、一度外に出て、正門次所より入場。)

問い合わせ・連絡先：高村みさ(中京大学国際英語学研究科教授) mekusuramisaki@chukyo-u.ac.jp
当日参加費なし、準備の都合上、事前予約が望ましい。